

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1173 号	氏 名	酒井洋徳
論文審査担当者	主 査 平塚左千枝 教授 副 査 本郷一博 教授 ・ 伊藤研一 教授		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>消化器疾患を有する患者は、しばしば一般の人よりも歯科治療が必要である。しかし、その仮定はいまだに証明されておらず、消化器癌の有病率と歯科疾患の関係は明確にされていない。今回、消化器癌の治療を受けた患者の歯科疾患有病率を調査した。</p> <p>① 消化器癌患者のう蝕罹患状況を調査 ② 消化器癌患者の歯周病罹患率を調査</p> <p>それぞれを歯科疾患実態調査と比較し統計学的検討を加え、以下の結果を得た</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 消化器癌患者群では DMFT 指数、未処置う蝕歯、う蝕処置済み歯の歯数は有意に少なく、喪失歯の歯数はやや多い傾向がみられた。DMFT 指数は癌の臓器別で有意差は認めなかった。</li><li>2. 残存歯数が 20 本以下の割合に関しては 60 歳代で、義歯の装着率に関しては 70 歳代で歯科疾患実態調査より有意に低い結果であった。癌の臓器別に有意差は認めなかった。</li><li>3. 歯周病に関しては、消化器癌患者群では歯周病有病率が有意に高かった。CPI コードの 3.4 を歯周病（中程度、重度歯周病）とし、ともに 50 代以降の年代で、癌患者群の罹患率が歯科疾患実態調査よりも有意に高い結果であった。癌の臓器別に有意差は認めなかった。</li></ol> <p>これらの結果より、消化器癌と多数の喪失歯ならびに低い義歯装着率は密接な関係が示された。また、重度な歯周病の有病率も癌患者群で高いことがわかった。歯周病と多数の喪失歯の関連性は、消化器癌発症に対し潜在的役割を果たしていることが示唆された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			